
Parasitic on Love.

Koto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Parasitic on Love.

【NZード】

NZ8891Z

【作者名】

Koto

【あらすじ】

あたしが恋をした相手は、あたしの兄を好きな“おかません”でした。

あれ？これって普通の恋より百倍大変じゃない？

そんなあたしの前途多難な恋する365日。

前途多難の幕開け

まるで、人形のよつだと思つた。

色素の薄い栗色の髪は襟足に届く程度まで伸ばされ、後ろで一つに結ばれている。それと同じ栗色の切れ長の瞳に、その瞳をより一層際立たせる涙ぼくろは壮絶なまでの色気を醸し出し、見るものを魅了しているのだと思う（きっとこの瞳を見つめられたら圧倒され、引き込まれ、動けなくなってしまはず）。細く長い手足に引き締まって無駄のない体はモデル顔負けと言つても過言ではない。

ただ一つ無理矢理にも難点にするならば生まれ持つてきたその中性的な顔立ちだろうか。

男にしては美しすぎる顔立ちだが、女にするならば少々いかつい。なんともアンバランスなようで意外とバランスのとれた顔は最早人形に例えてもおかしくはないと思つ。

そんな人形……基、三島綾稀は本当に人形のように体を床に投げ出し、だらりと横たわったままピクリとも動かなかつた。

そしてそんな彼に物申したい。

「綾ちゃん。」「あたしの部屋だよ……？」

眉を下げる綾ちゃんの側にちょこんと座れば、綾ちゃんはよつやくピクリと反応し、切れ長の瞳をこちらに向かへた。

思わずぞきこむと高鳴る心臓を慌てて押さとじめ、困ったように見つめれば、綾ちゃんは瞳をうつりとさせながら勢いよくあたしに抱き着いた。

「わあっーー？」

ぎゅ「ひつ」と今にも効果音が聞こえてきそうなほどにあたしを抱きしめ、ぐすんと鼻を鳴らす様は先ほどの人形と打って変わってただの人間みたい（いや、もとから人間だから…）。というか、いい男も形無しのような気がする……。

あたしはふつ、とため息をつき、そんな彼の頭をそっと撫でてあげた。

「「ひどいなひつしたの……？」

極力柔らかな声で綾ちゃんに聞え、綾ちゃんはよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりにあたしの肩をつかんでまくしてるように話し始めた。

「ましろーー聞いてよ。孝二つたり、孝二つたりああああああーー！」

と叫ぶ彼は形無じぢうではない。
最早“彼”ですらないと思つ。

だつて綾ちゃんの好きな人は……。

ガチャッ

「ん？なんか呼んだか？？」

ひょっこりと急に顔をのぞかせた男に、これまた一瞬で顔を変え、男前に戻った綾ちゃんはにっこりと笑つて否定した。

最早神業だと思ひ、うん。

「いや、なにも？な、ましろ？」

「え？う、うん」

氣のせいか、なんて言いながら頭をかくのはあたし、山城真白の兄、孝仁。
もうお分かりかな？ そう、綾ちゃんの思い人はあたしの兄、孝仁のお兄ちゃんなの。

つまり綾ちゃんはおかまさん、てこと。

「つかなんでもましろの部屋に綾稀がいんだよ」

「悪い悪い、ましろが可愛くてかまつてたんだよ」

すくっと立ち上がりながら頭をなぐる綾ちゃんに、またしても胸が
どきりと音を立てた。

「じゃあな」

そう言つてお兄ちゃんと一緒に部屋を後にした綾ちゃん。

あたしは不覚にも熱くなつた頬の熱を「まかすようにそつと頬に手
を当てた。

いい加減なれなくちやと「う気持ちと、嬉しいと思う気持ちに何やら複雑な気持ちが混ざり合つてもうなんだかよくわからない気持ち

になつた。『ひかりひかり』して気持ちが悪いといつが、なんか悲しいといつか……いや、虚しい……？

だつて喜びよりも大切なのはうが勝つてしまひから。

「はああ……。」

もうれもわかると思つ。

あたしは、綾ちゃんが好きなのだ……。

不毛な」とは百も承知。

だつて綾ちゃんは男が好きで、よりこよつてあたしの兄が好きなんだから。

あれ？

これつて普通の恋より百倍も厳しきじやないか。

私の中心

そういうえば昨日、綾ちゃんが言いかけたことってなんなんだろ？

あたしは授業中（しかも大嫌いな数学）にもかかわらず、ぼんやり窓の外から見える景色を眺めながらそんなことを考えていた（窓際一番後ろの席の特権だよね）。まあ、あんなにがつかり落ち込んでたんだからよっぽどのことがあつたんだろうなあ。じやなきや鼻水すすつたり涙目になつたりしないよね。

後でメールしてみようかな、なんて思つた矢先にポケットに入れていた携帯が震えた。

あ。綾ちゃんだ。

ちよつぴり運命的だな、なんて乙女チックなことを考えたあたしが恥ずかしい。

そんなこと考えたつて無駄なのをあたしはずーっと前から学んでる。少なくとも綾ちゃんがお兄ちゃんを好きだと知つて3日目以内には、ね。

妙な期待なんて捨てて、あたしはメールボックスを開き、綾ちゃんからのメールを見る。

ほひ、やつぱり。

ましろ～ツ。

孝仁「が冷たいいいいつ！…！」

綾ちゃんの頭の中でお兄ちゃんでこいつぱいなんだから。あつと、いや絶対綾ちゃんはお兄ちゃん以外考えていない気がする。いつだか綾ちゃんにお兄ちゃんの何がいいのか聞いたら真っ赤な顔して「全部。」って言つてたし。

妙な期待は当の昔に捨てたとしても、この胸のむくびれとす感じは一向に収まつてくれない。むしろ口が経つ」と、あたしが綾ちゃんを思えば思つほど増していく炎がする。あつとの痛みは好きと比例してるんだ。

何が冷たいの？？と聞きたくもないナビ一応送つてみると、綾ちゃんからはほんとに一瞬で返事が返ってきた。あたしが何気ないメールを送つたときは返事が遅いのに、お兄ちゃんに絡めたメールの返信はペカイチで早いと思つ。

やるせないよね、ほんと。

まじりにあげるからって、孝二がつべつたマフインもりえな

かつた（…）

くだらな！

あたしはそんなことかどがつべつ肩を下ろした。てめうかお兄ちゃんもマフィンくらこあたしじやなくて綾けやんにあげればいいのこ……。ため息一つついて返信しようとすると、また携帯が震えた。

（あ、お兄ちゃん……）

噂をすれば何とやらかな。

そしておにこちゃんからまじりの好きなマフィン作ったぞ〜〜とかいうメールが送られてきてこれまたため息が出た。これはお兄ちゃんに綾ちゃんもマフィン好きだからあげれば？とメールを打つべ

きなのかな……。ああでもあたし、確かにお兄ちゃんの作るマフィン好きだし、これたぶんバナナとチョコ入ってるからすんごーく美味しいと思つし……。

むー。

すうひぐく迷う。

そして結果、今田は学校で友達からマフィンたくさんもらつたからもう食べれないって嘘ついた。だから綾ちゃんにあげて?って。うん、これ結構酷なもんだよね。ならばあたしの好きなマフィン。涙がちょちょきれるよ、ほんと。

ブーブー……

あ。綾ちゃんからだ。

孝仁からマフィンもらつた!!

ありがとまじる。大好き!!

きゅん。

マフィン、諦めてよかつたかも……。

結局あたしは綾ちゃんに甘くて、綾ちゃん中心で考えちゃうんだよね。これって駄目だと思つけど、綾ちゃんが喜ぶならいいかなつて思つちやうから。それに、大好きって言つてもらえたし。

あたしも綾ちゃん大好き、そこまで打つて送信ボタンを押そつかどうか迷つた。

「これくらい、大丈夫だよね。

そう思いつつ、消した。

結局、どういたしましてつて簡素なメール文章を送ってしまったあたしはとってもかわいくないし、少しも素直じやない。でも少しでも好きひいて伝えてしまえばいつかどこかでボロを出して、きっと綾ちゃんに迷惑かけちゃうから。

やつがえるあたしはやつぱり綾ちゃんが中心。

到底勝てそうにない

時々、本当にこの家があたしの家なのかと一瞬疑問に思う時がある。例えば、そう言えば今日見たいに我が家の住民以外の人がソファでくつろぎながらお母さんと楽しそうに会話して、帰ってきたあたしに気付いたお母さんと一緒におかえり、なんて言っちゃつたりして。しかもおまけに自分の隣に座る様に催促したりなんかして（2人がけのソファを横に座るよう）。ポンポン叩いてた）。

我が家にすっかり馴染んで溶け込んでる綾ちゃんに苦笑しつつ、あたしはカバンを椅子に置き、催促する綾ちゃんの隣に腰をおろした。

「おかれり、ましろ」「あ、うん。ただいま」

お母さんがにこにこ微笑みながら、相変わらず仲良しね、なんてほのぼの咳く。それに同調して綾ちゃんも仲良しだねー、とか言つてあたしにピタツとくつづいた。うん、やめてほしい。

「おい、ましろ。なんか飲むか？」

お兄ちゃんが冷蔵庫の中をあさりながら聞く。お行儀の悪い兄だな、なんて思いつつ、オレンジジュース！と返せば、了解と返ってきた。もはや家に帰ってきてオレンジジュースを飲むことは習慣化してから飲まないと落ち着かない気もするほどあたしはオレンジュー
スを崇拜している（ちょっと大げさ？）。

「あ。母さん、オレンジジュースねえよ」

「あらやだ。買こむれひやつた。」めんね、まじね
「や、別にいこよ」

困ったように眉を下げるお母さんと苦笑する。こへり崇拜するほど好きでも我慢べりにできませんよ。いつまでたっても子供扱いなんだよなあ、なんて遠い目をしていると、綾ちゃんがねえ、とわたしの肩を叩いた。

「なあに?」
「じゃあ俺と眞一にてこいのか
「. . . へ?」

急な申し出にポカンと口を開けてこると、お母さんが嬉しそうにお願いできる??.?.と綾ちゃんお伺いをたてていた。

「良じですか。まひ、まじね。行くぞ」
「あ、う、うさん」
「孝仁はなんかいる?」
「. . . いや、いい」

綾ちゃんがあたしの手を掴んで立ち上がった。あたしは引きずられるように綾ちゃんに連れて行かれた。
繫がれた手が思いのほか大きいとか、あつたかいとか、そんなことばかり頭の中をぐるぐるまわって一瞬言葉を詰まらせてしまう。
そんなあたしに知つてか知らずか、綾ちゃんはニヤニヤ笑つて初々しいね、ってそう言って大きな手を離してしまつた。ほつとしたような残念なよつや気持ちが胸に残つた。

「別に、初々しくなんかつ
「はいはい。別に手繫いだつて戸惑つたりしないもんねえ」

「ひー」

くすくす笑う綾ちゃんにあたしは「まほ向かば、綾ちゃんば」「めんつて」と謝ってあたしの頭を撫でた。

あたしがこうこうされると慣れてなくして、すぐに赤面したりするのを知ってるから綾ちゃんは時折こうやってからかってくれる。あたしとしてはドキドキしたりして赤面しても、ただ照れて、慣れなくてそうなつてると思われてるから都合がこにけだ。

でも複雑だな。

だつて本当は綾ちゃんが好きで、エキドキして、いつもやつて赤面してるんだから。

「寒い・・・」

いつも言つて赤くなつたまづペを手で包めば、綾ちゃんはいつも言って前を向いた。

綾ちゃんはいつもお兄ちゃんの前とかじやあちよつと優しいお兄さん的な口調なのに、あたしと2人の時はひょいとお姉っぽい口調になる。

なんだか2人だけの秘密っぽくあたしは好き。

「綾ちゃん、お兄ちゃんと何かあつたの?」

「え、なんで?」

「え? だつて何かあつたからコンビニ誘つたんでしょう?」

キョトンとした顔で綾ちゃんを眺めると、綾ちゃんは笑つて首をふつた。

「今日はましろこいつものお礼、しようつと黙つただけ

「お礼？」

「いつも何かあつたら慰めてくれるでしょ？」

ありがとね、って綾ちゃんがキレイに笑った。思わずあたしの胸が不意を突かれた様にどきりと音を立てた。

ズルい。

本当にズルいよ。

そりやつてあたしの心を魅力して離さないんだから・・・。

あたしは慌ててうつむき、しゃべりと頷いた。だつて今、きっと、今までにないくらい顔が赤いから。

「ハーゲンダッツ・・・」

「ん？」

「バニラが食べたい」

ふつとい、噴き出す声が聞こえた。綾ちゃんはちょっと笑つて何個でも買ってあげるって。

精一杯誤魔化そうとしたらアイスおねだりってどんだけお子様な よ。自分の言動に肩をがっくりおとした。

「オレンジジュースは100%ね」

「はいはい、わかつてゐるつて。ましろつてばいつもあそこのコンビニのあのオレンジジュースしか飲まないもんね」

その言葉に田を丸めた。
なんで綾ちゃん、知ってるの？

「あー。なんで知ってるのって顔ね」

「ぐーぐーと頷けば、綾ちゃんはいたずらに笑って顔をぐつと近づけた。

「こつも見てるから」

なーんてね。

そう言つて歩先をく綾ちゃんに、あたしは到底勝てそうになこと思つた。

でも、やつぱり綾ちゃんはズルいよ。

「綾ちゃんのストーカー！」

「何おうつ？！」

余計好きになっちゃうじやないか。

アイスクリーム（前書き）

アイスクリーム

「ありがと「アゼ」ました~」

にっこり笑顔の店員さんに見送られながらあたしと綾ちゃんはコンビニをあとにする。綾ちゃんの大きな手にはたくさんのお菓子とあたしの大好きなオレンジジュースが所狭しと詰め込まれていて重そうだけど、そんなことはおくびにも見せない。いつも鼻をすすぐながら抱き着いてくる割には男らしいんだなって思った。

「大丈夫、重くない？」

「重いよ~? 誰かさんがハーゲンダッツ2つも買った上にオレンジジュースもちゃっかり2つ買つたから」

「う、ごめん」

まさかちょっとした腹いせに、だなんて言えないしね……。

「まあいいけど。あ、ところでましる、明後日の土曜日って暇?」

「え? あ、暇だけど」

「ね、一人ででかけない?」

首を傾げて伺う綾ちゃん。

そんな可愛いことされて断れる人つているの?いや、いないでしょ

!!

「い、いいよ」

「よかつた。孝仁には内緒ね?」

なんでお兄ちゃんに内緒?

まあ綾ちゃんだとお出かけできるならなんでもいいか！

「賄賂は駅前のジャンボパフェね」

「はいはい。全くよく食べる子なんだから」

ポンポンと頭を撫でる綾ちゃんにあたしゃはつぺたを膨らませた。
あそこのパフェすごく美味しいんだから！生クリームとチョコレートのしみ込んだスポンジ、それにお店の氷のアイスとの相性は計り知れないくらい良いんだよ！？全く綾ちゃんはわかつてないんだから。

「綾ちゃん、そこのパフェ食べたことないでしょ」

「まあ、あんまり食べないね」

「明後日はきっとやつのパフェの虜になるよー。」

「えー……」

「えーじゃないのーあたしが美味しさを教えてあげるからっ」

「はいはい、ましゅは甘いの大好きだからね？」

「もーっ！…

綾ちゃんてばバカにしてっ！…

「ただいま」

「あらお帰りなさい。綾稀君もお疲れ様？」

「そんなことないですよ。俺もお菓子食べたかったし」

ヒーリング笑えばお母さんがついついしたような微笑んだ。

「綾稀君、まじゅちゃんのお嬢さんにならない？」

「はあー？」

「お母さんにおつ……？？」

「ああ、それもいいですね。ましり俺の嫁になる？？」

またしてもぴつたりとくつこくあたしの肩を抱き、意地悪な笑みを浮かべて問う綾ちゃんを軽くどつこく、あたしは赤くなりながらも反対した。

「あたし、駅前のパフェの良さがわかる人と結婚するー。」

「パフェ？」

「どんだけあそこのパフェ好きなんだよ…………」

あよとんとした顔のお母さん、「呆れた顔しながらやつてきたお兄ちゃん。

お兄ちゃんとも一度パフェ食べに行つたけど良させなかつてもいいだなかつたんだよなあ…………。

「だつて美味しいんだもん。あそこのパフェ…………」

綾ちゃんにはあの美味しいわかつてもらいたいなあ。やつぱり好きな人にはわかつてもらいたいって、押し付けがましいかな…………？

「そんなましろつて可愛いよ。女の子っぽくしゃ」

ね？つてお兄ちゃんに同意を求めれば、お兄ちゃんも苦笑しつつもうだなつて言つた。別に無理して同意しなくてもいいのに。お兄ちゃんに言われたつて嬉しくないし……でも綾ちゃんに言われるのは嬉しい、な。でも綾ちゃんは男の子好きだから女の子っぽいつて言われても褒められてる気がしないいいい。

「ほらましり、早く部屋は入れ。みんなでゲームするわ」

「え？ ゲーム？」

「綾がWii○持つてきたからやるわ」

お兄ちゃんの手にはマ○カートやらコズ○天国やらが握られていてそりゃあもう楽しそう。うん、いますぐやりたい……！お母さんの後を追いかけてそそくさと部屋に入りうと思つたけど、先に綾ちゃんにお礼を言おうと振り返れば、お兄ちゃんが綾ちゃんから軽々と荷物をさりげなく受け取つてそのまま台所の方へと向かつつていった。そんな兄ちゃんをなんだか嬉しそうに眺める綾ちゃんがいて胸がズキズキと痛む。

その表情はいつもあたしに見せてくれる優しい眼差しと違つて愛しさが溢れんばかりに出でる。

嗚呼、やつぱり綾ちゃんの心はお兄ちゃんに向いていて、ちつともあたしなんか見てくれてない。

ズキズキと痛む心は増すばかり。

本当にあたしのお嬢さんになつてくれればいいのに。

あたしは綾ちゃんのお嫁さんになりたいよ……。

(心が、痛い……)

あたしは綾ちゃんから田を離し、一人部屋の中に戻つた。
テーブルに置いていたアイスは溶けかけていて、ほんのりと甘いにおいが鼻をくすぐる。

一口食べたアイスクリームはやつぱり甘くて、でも不思議となんだ

かしおっぱい気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8891z/>

Parasitic on Love.

2011年12月29日20時54分発行